

論文の和文要旨

論文題目	友人間の会話における「誘い行動」の日韓対照研究 ーディスコース・ポライトネス理論の観点からー
氏名	鄭 榮 美 (チョン ヨンミ)

本研究は、日本語と韓国語の友人間の会話における「誘い行動」の特徴を明らかにし、そこに潜んでいる円滑なコミュニケーションのための対人配慮行動のメカニズムを導き出すことを目的としている。

従来の「誘い行動」に関する研究は、アンケート調査や談話完成テストの分析、または会話の定性的分析が多く、対面会話における言語運用のメカニズムを一般化するものとは言いにくい。そこで、本研究では、言語行動に影響を与えるとされる要因（力関係、親疎関係、負担の度合い）について条件統制した会話データを用い、定性的かつ定量的な分析を行った。ここで得られた結果に基づいて、ポライトネスをダイナミックに捉えている Brown and Levinson (1987) の「ポライトネス理論」と、聞き手側の観点と談話レベルの相対的ポライトネスの概念を取り入れた宇佐美 (1998、2001、2002、2003b、2008) と Usami (2002) の「ディスコース・ポライトネス理論」の観点から、対人配慮行動のメカニズムを考察した。

本論文は、9章で構成されている。

第1章では、日本語と韓国語の友人間の会話における「誘い行動」の特徴を明らかにし、そこに潜んでいる円滑なコミュニケーションのための対人配慮行動のメカニズムを導き出すという本研究の目的について詳述した。

第2章では、本研究で捉える「誘い」の概念を説明し、「誘い」、ポライトネスに関する理論、談話、会話研究のアプローチに関する先行研究を概観した上で、本研究の方向性を示した。

まず、従来の研究における「勧誘」という述語の曖昧さを指摘し、誘い手の働きかけとしての「誘い」と、誘い手と被誘い手の相互作用を含んだ「誘い行動」という述語を提案した。また、発語内行為としての「誘い」の成立条件を示した上で、「誘い」は、相手のネガティブ・フェイスを侵害する側面と相手のポジティブ・フェイスを満たす側面が共存する言語行為であるという新しい観点を提示した。

「誘い行動」に潜んでいる対人配慮行動のメカニズムを明らかにするためには、Brown

and Levinson の「ポライトネス理論」と、聞き手側の観点と談話レベルの相対的ポライトネスの概念を取り入れた宇佐美の「ディスコース・ポライトネス理論」の観点から考察する必要があると主張した。更に、談話、テキスト、文章という述語の概念を概観した上で、本研究で捉える談話と会話における談話の認定方法を示した。また、「誘い行動」の特徴を浮かび上がらせるためには、ローカルな観点とグローバルな観点が取り込まれた「総合的会話分析」(宇佐美、2008)が有効であると主張した。

第3章では、「総合的会話分析」に従った本研究の会話データ収集法とデータ収録の手順を詳述した。文字化資料作成においては、日本語と韓国語における従来の文字化システムを概観した上で、誘い会話における相互作用を定性的かつ定量的に分析するためには、「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」(宇佐美 2007)と「基本的な文字化の原則:韓国語版 (Basic Transcription System for Korean: BTSK)」(宇佐美他 2007)が最も適していることを示した。また、文字化における発話文の改行や分析項目のコーディングの信頼性を検討する方法として、「評定二者間信頼性係数 (Cohen の Kappa: κ)」の測定方法を説明した。

第4章では、会話データにおける協力者、会話時間、発話文数に関する基本情報を説明した。また、会話データの「自然さ」、協力者間の「社会的距離」、誘いに対する「負担の度合い」に関するフォローアップ・アンケートの調査結果から、会話データの妥当性を確認した。更に、文字化における発話文の改行と分析項目のコーディングにおける信頼性を確認した。

第5章では、誘い行動の特徴を明らかにするためには、誘い行動を含む会話全体を分析対象とする必要があることを指摘した上で、談話レベルで誘い行動を取り上げ、誘い会話の構造とその流れを検討した。以下、主な分析結果を示す。

まず、日本語でも韓国語でも会話の開始部と終了部では誘い行動を行わず、誘いと関係のない話題(非誘い談話)を取り上げる傾向が明らかになった。開始部と終了部における話題の選択には、日韓共にポジティブ・フェイスに向けられた「話し手が相手との共通の基盤を主張する」というメカニズムが働いていることが分かった。とりわけ、韓国語では相手との親密さを強調する話題の選択が目立った。

そして、日本語では、韓国語に比べて、誘い行動の進行中に非誘い談話を挿入する傾向が強かった。それに対して、韓国語では一旦誘い行動を開始すると終了するまでは非誘い談話を挿入しない傾向が明らかになった。誘い行動の進行中の非誘い談話の挿入は、ポライトネスの観点からすると、発話レベルでは相手のポジティブ・フェイスに向けられたストラテジーであるが、談話レベルでは被誘い手のネガティブ・フェイスに向けられたスト

ラテジーであることが類推できた。

以上の結果から、言語行動とポライトネスの研究において、発話レベルの分析だけではなく、談話レベルの分析も取り入れることが有効であることを実証的に示した。

第6章では、誘い行動（誘い談話と誘い関連談話）のみを取り上げて、発話レベルで誘い行動のプロセスを検討した。以下、主な分析結果を示す。

まず、誘い談話における誘い行動の大まかなプロセスを示すと、日本語でも韓国語でも、誘う前に誘いと関連したやりとり（先行関連連鎖）を行い、被誘い手からの明確な受諾、または断り（核連鎖）があつてからも、誘いと関連したやりとり（後続関連連鎖）を続ける傾向が見られた。但し、日本語では先行関連連鎖が現れない場合は有標行動となるが、韓国語では現れても現れなくでも有標行動にはならないという相違点が浮き彫りになった。

また、誘い手と被誘い手との誘い内容に対する情報の共有度は、誘い行動のプロセスに影響を与える上に、核連鎖と後続関連連鎖における配慮行動にも影響を与えるという興味深い結果を実証的に示した。

続いて、誘い談話を構成する先行関連連鎖、核連鎖、後続関連連鎖の特徴を簡単にまとめる。先行関連連鎖は、誘い手による導入では前置きとして働き、被誘い手のネガティブ・フェイスへの配慮という効果が見られた。被誘い手による導入では、誘いを引き起こす働きがあり、それは誘いに被誘い手のポジティブ・フェイスを満たす効果をもたらすと解釈した。核連鎖においては、日韓共に誘いの直後に受諾が来ることが無標であることが明らかになった。後続関連連鎖は日韓共につなぎ発話文か交渉発話文で始まる傾向があり、誘い内容と関連した事柄を決めるための交渉と円滑なコミュニケーション維持のためのやりとりが中心となっていることが分かった。但し、交渉においては、韓国語ではある事柄に関する交渉が成立してから、また別の事柄に関する交渉に入る傾向があるが、日本語では交渉が成立していない状態でもまた別の事柄に関する交渉を始めるという違いが見られた。

誘い関連談話は一時中断された誘い行動の再開を意味するもので、日本語では誘い談話を補う形で、誘い談話で結論を出せなかった、または取り上げられなかった事柄に関する交渉が中心となっており、交渉発話文数も誘い談話に比べて2倍近くであった。一方、韓国語では、交渉発話文数が誘い談話の4分の1ほどであり、それは交渉が成立してから別の交渉に移すという交渉のスタイルが影響したためであると解釈できた。また、確認発話文のやりとりでは、日本語では誘い行動の終了を促進する働きが見られ、韓国語では中断された誘い行動を再開する働きが見られた。

第7章では、誘い行動の核となる誘い発話文とその直後に位置する応答発話文に注目した。誘い発話文は述部の表現に焦点を置いて分析を行った。その結果、日本語では「～シヨウ」、韓国語では「～자 (～ca)」の直接的な誘いとなる表現が最も多く用いられること

が確認された。その理由として、日本語では、述部以外のところ（非誘い談話の挿入、先行関連連鎖の存在など）で相手に対する配慮行動を補っていることが類推でき、韓国語では、誘いを相手のポジティブ・フェイスを満たす行為として捉える側面が強いと解釈した。

応答発話文においては、日本語では希望表現を用いた受諾が多かったが、韓国語では希望表現は見られず、誘いと関連した事柄を提案することで受諾の意向を示すものが多かった。

誘い方と応答の仕方の関係を見ると、日本語では直接的な誘いに対しても間接的な誘いに対しても、積極的な受諾をする傾向が強かった。一方、韓国語では直接的な誘いに対しては消極的な受諾、間接的な誘いに対しては積極的な受諾をする傾向が強かった。その理由として、日本語では肯定の意のみを伝える消極的な受諾は、社交辞令的な受諾として捉えられる可能性が高いため、受諾の意向を明確に伝えたいという被誘い手の意図が潜んでいるためであると考察した。韓国語では直接的な誘いに対しては消極的な受諾のみでも誘い手のポジティブ・フェイスを満たす効果が十分であると捉えられるためであろう。また、誘い手の意図が表面化されていない間接的な誘いに対する積極的な受諾は、被誘い手が誘い手の欲求を察したこととなり、誘い手のポジティブ・フェイスを満たす効果が一層強くなるためであると解釈した。

第8章では、本研究で得られた分析結果を、「ディスコース・ポライトネス理論」の観点から総括した。誘い会話、誘い行動、また誘い行動を構成する各要素の基本状態を同定し、そこからの離脱（有標）によって生じるポライトネス効果を、誘い手と被誘い手の相互作用の分析を通じて相対的に捉えた。一般的な見地からするとマイナス効果が予想される言語行為でも、話し手と聞き手がその行為に対する見積もりをどのような測っているかによって、そこにおけるポライトネス効果は変わり得ることを実証的に示した。そして、対人配慮行動のメカニズムを明らかにするために、相対的なポライトネスという観点を取り入れることの有効性を示唆した。

第9章では、研究課題に沿って本研究の結果をまとめた上で、日本語では、誘いの「相手のネガティブ・フェイスを侵害する」という性質が優先され、韓国語では、誘いの「相手との親密感を強めるポジティブ・フェイスを満たす」という性質が優先されることを示した。また、被誘い手は、日本語でも韓国語でも、誘い手のポジティブ・フェイスを優先することを示した。

更に、一つの発話にポジティブ・ポライトネスのストラテジーとネガティブ・ポライトネスのストラテジーとしての働きが共存する可能性を指摘し、ポライトネスの研究において、ある言語社会における対人配慮行動のメカニズムを見出すためには、ローカルな観点とグローバルな観点を交えた研究が有効であることを論じた。